

優秀賞

見えない壁をこえて

埼玉県立伊奈学園中学校 2年

匿名

私は小学生の頃、精神科医になることが夢でした。その影響で、当時から精神障害に関する本や番組を見ることが多く、「人の心」について考えることに強く関心を持っていました。ただ、それはあくまで『知識』であり、実際にそうした特性を持つ人と関わることはありませんでした。

中学に入り、私は小中学生に英語ディベートを教えるボランティアを始めました。その中に印象的な生徒が一人います。彼女はマイペースなおっとりした性格で、ディベートにも静かに取り組んでいます。しかし、集中が続かなかったり、時間内に準備を終えるのが苦手です。話の内容が脱線したり、思いついたことを空気を読まずに発言する姿も見られました。

最初は、それが精神的な特性によるものだとは知らず、私はモヤモヤした気持ちになりました。「やる気がないならやめればいいのに」と思っていました。しかし、回を重ねる中で彼女は自分なりに工夫していて、少しずつできることを増やしている姿に気づき、考えが変わっていきました。

ある大会の時、彼女が「最初から最後まで原稿を読み終えた」と笑顔で話しているのを見て、私はハッとさせられました。彼女にとってはそれが大きな達成だったのです。私は「ちゃんとやってほしい」という自分の基準ばかりを気にして、彼女がその中でどれだけ頑張っていたかを気付けていなかったのです。

この経験を通して、私は精神障害や特性に対して考え方が大きく変わりました。本や映像で学んだ知識だけでは見えない「その人自身」と向き合うことで、初めて本当の理解が始まるのだと感じました。精神障害は目に見えないし、周囲からも気付かれにくいため、ときに誤解や偏見を生んでしまいます。しかし、だからこそ「知ろうとすること」、「その人の立場から考えてみること」が何よりも大切だと学びました。

また、過去に読んだある文章の中で、「自分は精神障害を持っているけれど、特別扱いをしてほしわけではない。ただ理解して欲しい」と書かれていた言葉が、今になってより深く胸に響いています。私も今回の経験を通じて、特別扱いをするのではなく、誰に対しても同じように尊重しながら、その人に合ったかかわり方を見つけていくことの大切さを感じました。これからも、目に見えない個性を抱える人たちと、自然に、対等に関われるような姿勢を持ち続けたいと思います。